

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成22年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第50巻8月号(通巻613号)

風土



桜桃忌

神蔵

器

老鶯や千手観音一手空^あく

金輪際鎌倉を出ぬかたつむり

けむりては分葱の育つ御師の宿

水打つて天の入口いま開く

万緑やほとけどじやうの泡一つ

太宰忌のあをき畳につまづけり
雀つこ地べたに消して桜桃忌
しんかんとして竹の子の抜衣紋
一本の月光のぼる蜘蛛の糸
神楽坂琴のごとくに梅雨の月
百選の墨たまはりぬ花菖蒲
涼しさや机に置きて「無」の一字



竹間集

同人作品



五 月

関根洋子

エアポートエクスプレスや風五月
見下ろしてTOKYO BAYの卯波かな
タンカーの重き錆色夏来る
切り立てのレモンのやうな五月かな
剥き出しの梁のうねりや閑古鳥
著莪の花子を両脇に虚手眠る
木洩れ日の中の母子像聖五月

滝 山

田中佐知子

露を摘む「蛇切りの岩」を遠巻きに
五月鯉海山の風行き交へり
山宿の塩の効きたる豆ご飯
若葉風ことに神馬のたてがみに
分校の窓より見えて桐の花
みどりさす磨き上げたる経机
滝を仰げば滝山のかぶさり来

春行くや

工藤ミネ子

連翹の光はじける売家札
光円を描きとどまる揚げひばり
根の国の吾子の不惑やつづみ草
春の海白神山を浮かべたる
雪柳風の重さを計りをり
春惜しむ太陽へ手をかざしつつ
春行くや夕日真近の干拓地

夏の霧

柴田 久子

生きてゐる人を集めて寺薄暑
新樹光レース模様の陽が浮きて
薔薇園や水を吸ふ石弾く石
一村の音を消したる夏の霧
七輪の鮎焼く炭火まさをなり
更衣してポケットに非常薬
大山のしぼり出したる滝の音

花は葉に

中村 洋子

牡丹咲く正面にある大講堂植
牡丹の百花の盛り建長寺
おたまじやくし三四郎池生れかな
祭来る風動き出す外神田
花冷えの神田古本市へかな
一山は西行の寺花は葉に
西国巡礼一番札所緑立つ

杜 若

橋添やよひ

万緑を迫り上げてをりあふり山
まがたまの香や一息の涼もらふ
透く紙の水占ひや貴船祭
大名の菩提寺松のみどり立つ
競べ馬風となりたる埒の内
みくまりの賀茂の社の杜若
平安のいろのたとへば杜若

伸びゆくも

南 うみを

植糸替へや坊主の葱を刈り払ひ
竹皮を脱ぐや深爪じんじんと
余り苗色失ひつ伸びゆくも
鯖そぼろ甘く煮つめて丹後に住む
空海のひらきし山のみどりかな
空海の坐りし石ぞ山の蟻
大釜に茶袋踊る梅雨入りかな

身辺詠

— 野沢しの武 —

瓶に百合駅長一人だけの駅
ビニール被て朝刊とどく桜桃忌
空蟬をのせて岩波文庫本
やませ寒ム畳まれずある洗濯物
父看取りしは勤務医のころ鉄線花
亡き友と話し通して明け早し
草笛やともに吹きたる兄は征きき
白髪を亡母より享けて沙羅の花
子に厳しき父でありしか蟾蜍
失語して額の汗拭く老生われ

山河集

同人作品



神蔵 器選

接岸へ月のデッキを通りけり 島 玲子

香水の舷門へ階下りをり
六月や青き地球のバルト海
船旅の露けきものと思ひけり
ロシア近し怒濤のさまや白夜光

ふるさとに晴好雨奇の植田かな 安永 圭子

根分する一鉢ごとに父のこ糸
夏シャツを干す小劇場の二階かな
ゆりの木の空への便り花ことば
青蛙五郎太の上を飛び越えて

林 いづみ

夏に入る歩幅一寸ほど伸びて
道灌に首塚 胴塚 雀の子
青梅や廊下伝ひの導師宿

ケーブルの駅見えて来し汗ぬぐふ
速達ばかり届く筍梅雨の中

初夏の紙垂くぐる御師の宿 奥山 茶々

独楽の絵を数へし石段ラムネのむ
新緑の大山寺に味噌入荷
薄暑光仔牛に指を吸はれけり
草笛の音の出るまで蛙に立ち

隠れ切支丹の村

浅田 光代

老鶯や蒔絵の腕の花クルス
更衣へてうなじたちまち風捉ふ
みほとけと語りて長きみどりの夜
牡丹の揺れて一島ゆれにけり
消しゴムに定位置のなき梅雨入かな

◇特別作品◇（抄）

春から夏へ

和田あきを

まほろばの筑紫に蝌蚪の生るるかな
花の山黙って妻と下りて来し
少し酔うて葬の歸りのさくらかな
花散るや昭和史にある戦死報
啄木忌いまでも好きなパンの耳
母の日や妻ふくろふのペンダント
六月やああ白秋のデスマスク
高階に蟻来て曾良の忌なりけり
ふるさとを捨てふるさとの滝に佇つ
大いなる父の帽子やチェホフ忌

風土独語／神蔵 器



一条の滝白刃のこ糸放つ

林 いづみ

この一条の滝は良弁の滝であろう。天平勝宝七年（七五五）奈良東大寺の別当良弁僧正（二歳のとき鷲にさらわれて春日社前の杉（良弁杉）の枝に置かれ、義淵に養育されたという伝説がある高僧）が、大山を開山する際、この滝で禊をしたことから良弁滝と名付けられた。古くは僧たちの修行の滝であったようだが、江戸時代になると大山講の人々が、先ずこの滝で身を清めることがならわしになり、現今でも出世滝などと呼ばれている。

滝は全山万緑の真っ只中、ただ一条の細身であるが高さは充分、鍛えられ、研ぎ澄まされた古今の名刀のごとく乾坤一擲、裂帛の気合を放つ、見事な作品である。

接岸へ月のデッキを通りけり

島 玲子

作者、島玲子さんは、四月十六日に横浜港を出航、北半球一周、百一日間の船旅に出航された。感心したのは船旅の途中でも、「風土」への投句は欠かさずFAXが送られて来た。

今回の送稿はデンマークからで、船はバルト海に入りデンマーク、ポーランド、ロシア、フィンランド、スウェーデン、ノルウ

エーなどを巡ってゐるらしい。本船旅の中でも最高最良の見どころではなからうか。風光は申すまでもなく、特に北欧三国の人たちは日本人には友好的であると聞いている。上陸する港々で楽しい思い出、ロマンの花も咲いていることであろう。

とは言っても長い船旅、いかに船上の生活が快適といつても、次の寄港地に早く着きたい思いは切なるものがあるう。ましてデンマーク、寄港し上陸するのはコペンハーゲンか、それともどこか、胸が高鳴る。

なお、一つ気になることは季語の月である。この季節、デンマークあたりの白夜はどうなのか、白夜の月も日本の昼月とはまた違った風情がある筈で童話か夢の世界に憧れるのであるが…。

トラックへ牛の尻押す夕焼雲

井口 光石

今、牛のこととなると宮崎県の口蹄疫のことがすぐ頭に來て離れない。今月七月一日の毎日新聞によると、先月三十日までにくチン接種を受けた殺処分と埋却作業のすべてを完了、今日までに殺処分された家畜の合計は二七万六〇四九頭に達した、とあった。あの温厚な東国原知事は、世上の批判に「おれたちだって全力を上げてやっているんだア……」と拳を振り上げていたが、何にも知事一人の問題にしているわけではない。国や県の行政面に根本的な問題があるのではないかと、二十七万余の家畜の中には、まだ感染していない牛や豚も多く居たであろう。徹底的、万全の予防のためとはいえあまりにも痛ましいことである。

掲出句は勿論口蹄疫には関係はない。しかし、牛がトラックに乗せられて移動することは、あまりいいことは想像しにくい、新しい牧場への旅立ちと思ひ、この牛の幸せを祈りたい。（以下略）

風土集



神蔵 器選

株分くる蘭の花芽をかばひつつ 東京

林 いづみ

青葉闇より一団の参拝者

八幡宮舞殿前に落し文

一条の滝白刃のこゑ放つ

八十八夜母の言葉の減りゆくよ

たぎり落つ大山祇神の岩清水

川崎

内藤 静

かはらけの落ち行く青葉若葉かな

十一や大山寺に燭の燃え

雨蛙其角の墓のうしろより

とうふ屋の商ひ終へし桐の花

梯子下り鋏をはづす薄暑かな

上尾

根岸 善行

あめんぼう走り水面のはがね色

青嵐や三時に開く三時草

黒百合の花に集ふや風と雲

朴の花大きな寺へ突き当る

母の日や吹かぬ風音闇に聴く

薫風や植田の中の大風車 川崎

井口 光石

夜鷹鳴く峠越え来て星ふゆる

泰山木咲けり遠見の富士容れて

トラツクヘ牛の尻押す夕焼雲

寺に売る味噌は辛味噌夏木立

万緑の真つ只中に伽羅路屋 横浜

近藤幸三郎

夏に入る木地師の肘の力瘤

あしびきの寝釈迦の纏ふ滝筈

登り来し天狗の山に余花の雨

五月かな父の直球子が受けて

祓麻受けて奥社へ朴の花 相模原

雲所 誠子

薫風や祈禱始めの大太鼓

不規則の音は雨だれ青嵐

延命と聞きし名水山法師